

#### 4. アポロンの<sup>へんれき</sup>遍歴の話。その一

爺の話は、まだまだ続く。

「辛い時、亀の足踏み、幸せの時、頭上をまるで、兎跳び。亀の話は、幼き日のヘルメス抜きには語れず。アポロンの留守を狙い、その牛を<sup>あとずさ</sup>後退りさせ、足跡残し、<sup>おび</sup>誘き出したが、<sup>おこな</sup>行い発覚、自ら作った亀の<sup>わ</sup>豎琴、詫びに差し出す。月日過ぎ、アポロンの蟹の琴、壊れ、ヘルメスから得た亀の甲羅の琴を携えて、狩りに夢中の妹神のアルテミスに別れを告げて、半人前のアポロンは、デロス島を抜け出し、本土に渡り、いざ、<sup>へんれき</sup>遍歴の旅に出る。オリンポスの神々、ティタンの神族を、権力の座から降ろしたものの、この世界、オリンポスの神々<sup>いっとう</sup>一統、ティタン神族、ケンタウロス、などの怪物、妖精ニンフ、人間、家畜、野獣<sup>たぐい</sup>の類と、多くのものが、時には平和に、またある時には反発し合い、兎に角、暮らしておつたとさ。

アポロンは、まずは、自分の将来を知るべく、ティタン神族の、<sup>みこ</sup>巫女たる<sup>おおおば</sup>大伯母、<sup>ざいしよ</sup>テミスを訪ねた。テミスの在処は夜空の<sup>かなた</sup>彼方、主星スピカ白く輝く乙女の座。

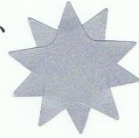
肩には、大きな<sup>つばさ</sup>翼を背負い、黒い喪服<sup>もふく</sup>の<sup>おおおば</sup>大伯母テミスは、祖父たるクロノス、姉にあたるも<sup>うるわ</sup>麗しき、乙女の姿を<sup>とど</sup>止め置けり。まだあどけなさの残るアポロンを、この上も無く可愛がり、予言の術を伝授した。彼女の予言の力量は、既に弟クロノスの将来さえも言い当てたもの。免許皆伝した上で、テミスは、若いアポロンに、永遠の青春を約束した。夕暮れの、アポロンの<sup>つまび</sup>爪弾く<sup>ね</sup>豎琴の音にテミスは<sup>はる</sup>遙か、いにしえの、姉ハルモニアと親しんだ、ティタンの昔を思い出す。やがて来たアポロン旅立つその朝に、テミスは、ゼウスと9人の娘を設けた姉ハルモニアに、アポロン頼むと手紙に託し、再び旅へと、送り出す。

記憶の女神たるハルモニア、住みたる処は、乙女座の遙か彼方の旅の空。テミスの手紙に目を落とし、涙一筋文字を消す。思えば、過ぎにし栄華の日々。<sup>いと</sup>愛しき弟、クロノスの、幾久しくも葬り去られ、封印された武勇伝をば、語り出す。<sup>かたわら</sup>側に立つアポロンは、ハルモニアの、記憶の底より<sup>あふ</sup>溢れ出て、口からたぎる熱弁に心奪われ、なお未だ、聞き知ることなき話に、耳傾ける。



「星の位を申し渡す。

マイナス等星は、



ゼロ等星は、



1等星は、



2等星以下は、



」

スピカ星

乙女座

(Virgo)

V

VIRGIN IN

VERY VAGUE VEIL

挿絵 3 : 謎<sup>なぞ</sup>のベールに包まれた乙女神<sup>おとめがみ</sup>、その名はテミス。

ミューズという名の娘らは、異母の<sup>おとうと</sup>弟、アポロンの、  
凛々<sup>りり</sup>しき姿に心を許し、秘めたる予言に心動かし、豎琴  
の妙なる調べに心を酔わせ、声合わせ、相和<sup>あいわ</sup>して、時には高くまた低く歌、歌う。月影に<sup>いこ</sup>憩うニンフや動物たち  
も、耳を傾け夜も更ける。昼は昼とてアポロンは、野に  
出てミューズ、娘らと、花摘み遊び<sup>たわむ</sup>戯れる。姉たちは、  
競って弟アポロンに、知りたる<sup>うた</sup>詩を口伝え、英雄伝を語り  
継ぐ。興<sup>きょう</sup>乗れば、姉たちは弟の顔に、粉を<sup>は</sup>刷き、<sup>べに</sup>紅を引き、  
髪に花指し、衣装を着せて、女神に仕立てて大騒ぎ。

アポロンは、今やその地で一番の芝居<sup>たっしや</sup>達者で歌達者、祭りに呼ばれ、褒<sup>ほ</sup>めちぎられて、スッカリ、スッカリ有頂天。  
ある宵に、吟遊<sup>ぎんゆう</sup>詩人が訪れて、彼の<sup>か</sup>異国の話をし、また、  
英雄伝、語り出す。アポロンもミューズもともに手に汗握り、  
ハラハラ、ドキドキ、聞いた話の主人公、誰あろうことか、  
アポロンの、<sup>い ぼ きょう だい</sup>異母兄弟たるヘラクレス。

それを知ったアポロンは、ハッと自分を取り戻し、  
姉たちの嘆きに送られて、乳と蜜に溢れたる、夢の暮らし  
に別れを告げた。そうじゃ。」

## 5. アポロンの<sup>へんれき</sup>遍歴の話・その二

爺の話は、まだまだ続く。

「アポロンは、手柄を求め<sup>さまよ</sup>彷徨って、ケンタウロスが治めたる、<sup>いきょう</sup>異郷に足を踏み入れた。ケンタウロスとは、上が人体、下が馬体の怪物で、イクシオンと雲ネフェレがご先祖様。大方が、山野や森で気ままに暮らす、野蛮な、酒好き、そして、女好きの<sup>よたもの</sup>与太者だった。ケンタウロスの在処とは、夜空の彼方のケンタウロス座。アポロンは、王を捜して、森を進んだ。暗い森、怪しい気配。アポロンは、弓矢を背中に<sup>にな</sup>担い<sup>あ</sup>つつ、敢えて<sup>たずさ</sup>堅琴、手に携<sup>つまび</sup>えて、爪弾きながら、奥へと入り込む。<sup>こと</sup>殊の外大きい樹木のその前を、通り過ぎたるその<sup>せつな</sup>刹那、一本の矢がアポロンの、琴を爪弾く、指をばかすめて、樹木の幹にぞ突き刺さり、琴を幹にぞ張り付ける。風に揺れ、心そぞろに琴は鳴る。時置かず、一筋の鮮血が、アポロンの指からほとばしる。更にして、身に<sup>まと</sup>纏いたる衣装さえも、ことごとく、雨と降り来る、矢に刺し貫かれて、アポロンも、樹木の幹に捕らえられ、身動きできず、立ち往生と、なり果てた。

茂みから出たる矢の射手は、良きケンタウロスの王で賢者のうわさも高い、ケイロン。弓達者の勇者の誉れに加え、医術、秘術にまでも秀でたる、真の古つわもの。

賢者ケイロンを語るには、エピオルニス、退治の話は欠かせない。或る朝、かの地の岬の外れで、大風吹いて、森が崩れた知らせがあった。ケイロン、早速、武将を集め、隊成し、密かに森を抜け出して、現場に向かう。犯人は、エピオルニス。エピオルニスは、身の丈、森一番の老木の頭を遥かにしのぐ、巨鳥にて、何処からか訪れて、なんのはずみか、岬の外れに棲みついた。嘴で、森の木集めて巣を作り、時折、海にて海豚の群れを一飲み、栄養を付け、また、海底に潜りて、貴重な色石、集めて巣へと持ち帰る。

ケイロン、順次、武将を偵察に、派遣し、巨鳥の様子を探らせた。最初の偵察終えて、卵を一つ産んだ、と告げられ、偵察の都度、卵の数は増えたが、三個目の卵の報告にも、ケイロン、動かず。その間も、巨鳥、海で餌取る以外の時は、卵を温め続け、卵は、何時孵るとも知れず。更に、四個目の卵を産んだ、との知らせを聴くや、ケイロン、動く。

オオカミ座  
(Lupus)  
(カッカブ)

ケンタウロス座  
(Centaurus)  
(メリケント)  
(イータ・ケンタウリ)  
(パーダン)



(アゲナ)  
(トリマン)

射手座  
(Sagittarius)

(ヌンキ)



(カウス・  
アウストラリス)

K  
KIND KEYRON

KEYMAN & KING OF KENTAUIROS

挿絵 4 : 心優しきケンタウロスの王、その名はケイロン。

一隊率いて、気配も見せず、巨鳥の巢へとにじり寄る。親鳥、餌取り、海に向かう隙を狙って過たず、火撃ち石にて巢に火を放ち、巢は燻り出す。異変に気付いた親鳥は、遙か沖より、一直線で、巢へと飛び来る。降り立つための羽撃きで、ついに、巢は一面の炎に包まれる。親鳥は、血走った鋭い眼力で、ケイロンらを睨みつけるが、ここは、火急事態にて、まずは、二つの卵をば、両肢の爪で、しっかりと攫み、嘴で、残り二つの卵をば、併せて啜えんと試みるも、大き過ぎ出来ず。さらば、卵を口腔に隠さんと、試みるも、大き過ぎ、息すら出来ず、目白黒。已む無く、一つの卵を打ち捨て、一つの卵を啜えて、急ぎ飛び去る。皮肉にも、この飛び去りで、巢の火は消えたが、巨鳥、後を振り向くことなく、最早、宙の彼方へ消えさるのみ。

ケイロンら、親鳥エピオルニスの、残したる卵への想い断ち切るため、卵をば食せんと、槍突き立てるも殻固く、諦める。次に、槍の尻を梃子に、卵の尻に押し当て、力併せて押すも、卵、進路定めず、あちこち転がるばかり。ケイロン、武将に、幹太の木を、出来る限り集めさせた。



それを、岬の先の<sup>だんがい</sup>断崖目指し、並ばせ、幹に油を塗り、その上を、卵、滑らせ、岬の先に運び出し、そこから、海へと突き落とす。卵、突き出た岩で、割れることなく、海に浮かび、ひたすら、大きくなりつつも、波に<sup>ただよ</sup>漂い、海流に乗り、<sup>いずこ</sup>何処へと、<sup>いつかえ</sup>流れ去る。何時<sup>いつかえ</sup>孵るか、宇宙の卵。

ケイロンら、焼け残る巢に立ち戻り、エピオルニスの親鳥が、<sup>きれい</sup>奇麗という、だけの理由で、ついつい集めた、海の色石、<sup>いろいし</sup>実は、稀なる宝石と知って、ケンタウロスの民への土産と<sup>たずさ</sup>携えて、元来た道を、歌、歌いつつ、帰る。ケンタウロスの民ら、エピオルニスの退散とケイロンの<sup>みやげ</sup>土産に、足踏み鳴らし喜び、<sup>こどう</sup>鼓動は大地を揺るがした。さて、何を話しそうとしたかの。そうじゃ、そうじゃ

話、また戻って、アポロンの遍歴の話。アポロンの父ゼウスにとり、異母兄弟たるケイロンと、アポロンとの仲は、<sup>おい</sup>伯父と甥との見知った仲。明るみで、アポロンを認めたケイロンは、矢を樹木から抜き取って、アポロンの体を支えつつ、近くの草を<sup>むし</sup>筆り採り、もみほぐして汁を出し、アポロンの指に塗るや、<sup>たちま</sup>忽ち、あら、不思議。

アポロンの、血は跡形もなく固まり果てて、まず、事無きに納まった。アポロンは、我を忘れ、ケイロンの、巧みなる弓の腕前と、医の知識とに、心奪われ、魅せられて、侵犯の非をば謝<sup>あやま</sup>り、すぐさまに、弟子入りを志願した。ケイロンは、素直なアポロンに心を許し、師と弟子との契りを結んで、二人は、ケンタウロス座の近く、射<sup>いて</sup>手<sup>ざ</sup>座<sup>いおり</sup>に庵<sup>いおり</sup>を結んだ。

ケイロンの、歩<sup>ところ</sup>む<sup>ところ</sup>処<sup>ところ</sup>にアポロン有りて、アポロンは、影のごとくに、ケイロンに、付き従って、領地の山野や森を、縦横無尽に駆け巡り、師の術をば身につけた。その傍<sup>かたわ</sup>らで、アポロンは、善きケンタウロスとも識<sup>し</sup>りあつて、心静かな夕べには、丘の上なる空き地にて、師を取り囲み、車座作り、月を眺めて、琴<sup>かな</sup>を奏<sup>かな</sup>でて、歌、歌い、踊り、踊つて、飛び跳ねて時を過ごした。はや、時満ちて、ケイロン、弟子たるアポロンに、総<sup>すべ</sup>てを伝えた事を告げ、アポロンは、親愛なる師ケイロンに、せめてもの感謝の気持ちを込めて、秘蔵の豎琴を手渡して、師の元から退いた。ケイロンが、居れば、ケンタウロスの民も、永らく安泰だったろうに、残念じゃ。ケイロンの宿命<sup>さだめ</sup>は、別の機会に話すとしよう。」

## 6. アポロンの<sup>きかん</sup>帰還の<sup>ごじつだん</sup>後日談

「その後も、<sup>かくしよ</sup>各処で修業を重ねたアポロン、長い遍歴の旅を終え、デルフォイを経て、デロスの地に舞い戻る。デルフォイに、<sup>いるか</sup>海豚の<sup>こわいろ</sup>声色にて<sup>しんたく</sup>神託下す、アポロン<sup>ゆかり</sup>縁の神殿あり。縁は、アポロン、その身をば、海豚に変じて、船に追いつき、帰路についた地。在処は、海豚座<sup>あた</sup>の<sup>あた</sup>辺り。

悲しかな、時は矢のよう戻らぬもの。<sup>いたいけ</sup>幼気な、双子座なる、わらしこらは、既に、デロスの浜に無く、ただ、波の音だけ、変わる事なく、寄せる大波、返すは小波。

旅を終え、いつの間にか、アポロンは、太陽の神のみならず、予言、音楽、弓術、医術に<sup>た</sup>長けた、<sup>た</sup>牧畜、<sup>た</sup>家畜を<sup>つかさ</sup>司<sup>とこはる</sup>どる、<sup>とこはる</sup>常春の青年神の戸口に立った。

アポロンの遍歴の旅の合間には、アルテミス、<sup>いもうとがみ</sup>妹神はデロスの地を、一人で守り治めたが、<sup>せいらい</sup>生来、無性に狩りが好き、彼の地切つての名うての狩人。取り分けて、夜には、目を<sup>きら</sup>煌めかせて、抜き足、差し足、森へと入る。己の光に照らされて、妖しく闇に輝く獣の、<sup>そうぼう</sup>双眸中央の少し下、目掛けて、矢を射て<sup>しんぶ</sup>心腑を射抜き、物にする。

アルテミス、兄アポロンと浜辺に遊ぶ、わらしこも、  
月日経ち、神の摂理か、兄にも負けぬ、麗しき美貌を備え、  
うわさ<sup>うわさ</sup> 噂<sup>あまた</sup> 聴<sup>おとこがみ</sup>きつけ、数多の男神達が、<sup>か</sup>彼の地に訪れて、口々  
たた<sup>たた</sup> 称える言葉を尻目に、狩りの勝負を申し入れ、ことごとく  
相手の神を打ち負かして、肩を落とさせて、<sup>あおいきといき</sup>青息吐息で、  
もと来た道を、スゴスゴ帰らす、<sup>おんなじょうぶ</sup>名うての女丈夫。並の  
男神では、力不足でもものたらず、並の女神は、その美貌  
に打ち勝てず。

人呼んで、アルテミスは<sup>おとめがみ</sup>乙女神、男嫌いの乙女神。

アルテミス、風の便りに、兄アポロンの<sup>しよぎょう</sup>所業をなにかと  
聴く度に、懐かしさと合わさりて、<sup>とき</sup>なぜか時めくその心。  
普段見るアルテミスと別人でまるで恋する乙女のように。

アポロンの帰還を聴くや、アルテミス、いったんは、  
樹木の影に身を隠し、生えたる枝の隙間を透かし、一目  
見ようとしたものの、<sup>せつな</sup>その刹那、アポロンの、あまりに輝く  
その姿、見たアルテミス、<sup>たちま</sup>忽ちに、<sup>まぶ</sup>眩しさ故に、<sup>くら</sup>目が眩み、  
<sup>かんばせ</sup>顔を、夕焼け空に染め上げて、直ちに、<sup>ひるがえ</sup>その身を翻し、  
山の向こうへと、消え去った。

アポロンは、期待に反し、アルテミス、再会<sup>かな</sup>叶わず、  
訝<sup>いぶか</sup>ったが、彼の地にて、ミューズら9人の娘から聴きて  
知ったる乙女の心、想い起こし、夕焼けに豎琴<sup>つまび</sup>爪弾き、  
静かに歩み去る。アルテミス、山の彼方から、懐かしき  
兄の豎琴、聴いて涙<sup>ひとしづく</sup>の一滴。気を取り直し、山下りる。

この日より、兄の神たるアポロンは、遍<sup>あまね</sup>く光りを振り  
注ぎ、昼の世界を支配する、光り輝く太陽の神。そして  
また、妹神たるアルテミス、アポロンを避けて、密かに  
息衝<sup>つ</sup>く、夜の世界を支配する、月の女神と相成<sup>あいな</sup>った。各々  
在処と決めたのは、太陽、勿論<sup>もちろん</sup>、アポロンで、月、また  
勿論、アルテミス。妹は、狩り、手間取<sup>す</sup>っての帰り道、  
偶<sup>たまさか</sup>に、兄を見掛けること有るも、顔面、白く狼狽<sup>うろた</sup>えて、  
心静めて遠巻きに、消え入るように、身を隠す。

朝な夕なの明け暮れに、兄妹、擦れ違<sup>す</sup>う時を、妹、心待ち  
にして、朝に朝焼け、夕べに夕焼け、茜<sup>あかね</sup>の雲に、頬染める。  
極めて稀に、神の采配<sup>さいはい</sup>、兄妹出遭うことがある。それは、  
月、日を食べらう、日食で、この時、妹神たるアルテミス、  
己<sup>れんじょう</sup>の恋情、断ち難く、コロナとなって燃え上がる。

時を経て、アポロン、ギリシャの民が住む、遙かな<sup>か</sup>彼の  
地に赴<sup>おもむ</sup>いて、コロニス<sup>おむ</sup>をば妻として、子、アスクレピオス  
を得た。アルテミス、コロニス<sup>そね</sup>嫉むこともなく、甥<sup>おいこ</sup>子を  
陰より支えていた。アスクレピオス、病みたる民を救わん  
と、父アポロンに申し出て、医術の伝授を乞い願う。

父は、申し出<sup>うれ</sup>嬉しく思い、自ら教えるよりも、我が師、  
彼の賢者、ケイロンに、弟子入りさせんと、神々の使者  
たる韋駄天<sup>いだてん</sup>、ヘルメスに、手紙を持たせて伺<sup>うかが</sup>い立てる。  
ケイロン、今では、王の座を、息子に譲り、悠々自適、  
彼のアポロンの頼みに大いに喜び、アスクレピオス、受け  
入れる。ケイロン門下のアスクレピオスの話は、又する  
機会があろう。長年の修業の末、アスクレピオス、起死<sup>きし</sup>  
回生<sup>かいせい</sup>の術を身につけ、祖国に帰り、遂には、医術の神と  
なる。その後、叔母アルテミスの願いを入れて、使った  
術を、祖父ゼウス、咎<sup>とが</sup>め怒り、召し上げ、夜空の星とす。  
その座は師、ケイロンの、座たる射手座<sup>かたわ</sup>の傍ら寄り添う、  
蛇遣<sup>へびつか</sup>い座。頭星<sup>かしらぼし</sup>、その名は、「ラス・アルハゲ」。  
長一いアポロンの話は、これでおしまい。また、明日。」